

中山科学振興財団
第20回（平成23年度）テーマ

「睡眠の生物科学」

趣意書

ヒトは人生の三分の一を眠って過ごすというが、眠るのはヒトだけではない。ゴキブリも、メダカも、蛙も、亀も、ライオンも、そして小鳥たちも眠る。恐竜たちも眠っていたはずだ。およそ、脳を持つ動物はすべて眠る。このように多くの動物に共通の現象である睡眠は、生物科学における最も重要な研究テーマの一つとして、古今東西多くの研究者をひきつけてきた。しかし、その科学的解析方法が確立したのは、今から半世紀ほど前に過ぎない。

1960年代になり、外見からの観察だけでなく、神経生理学的方法論を取り入れることによって、ヒトや動物の睡眠状態を客観的に解析することができるようになった。このような研究方法を取り入れることによって、睡眠には二つの異なった相があり、その一つは夢を見ている状態に対応していることも明らかにされ、睡眠研究は飛躍的に進歩した。また、これに伴って、様々な睡眠障害の病態やその治療法に関する研究も大きくクローズアップされるようになってきている。更に、現代社会における昼夜を問わぬめまぐるしい社会活動の展開は、睡眠のリズムに影響を与え、様々な精神的・身体的問題を惹き起こす。そのため、ヒトの社会活動に対する睡眠の影響も大きな研究テーマとなってきた。

このように、生命の存続において重要な意義を有することが明らかになった「睡眠の生物科学」に関する、優れた研究業績の推薦と、新しい独創的な研究の応募を、大いに期待したい。